

遊びの発見 ②

有木昭久

(あだ名・アリンコ)

移動大作戦

① 移動あそび

「こっちのチームはこの線の上に、こっちのチームはあの線の上に立って並んで下さい。」

……(さあ並べたけど何をしようかな)

「さあ並んだかな。エ—— ヨーイドンの合図があったら、相手チームの線にむかって、ぶつからないように走っていつて早くきちんと並んだチームの勝ちという遊びだ。(ホッ) ヨーイドン」これは川崎市のA幼稚園で、年長八十人をたまたま、二チームに分け線の上に立たせて、とっさに出た遊びが、この移動あそびであったと、所員の齋藤登氏が語って

くれた。

この時の指導は見ていなかったが、この遊びの話を聞いて、「これは面白い」私も現場でやってみようと思った。

② 「模倣」から「感じ」をつかむ

考えもなしにとっさに出た遊びが、子どもの心をつかむものが多い。遊びとはそういうものなのかもしれない。

横浜市のN幼稚園で初めて、年中児四十人とこの遊びをやってみた。棒で二本の線を二十メートル位離して、二十人位が並べるように書いて、まず男の子と女の子のチームに分けて、それぞれ線の上に立つように指示した。

「みんな線の上にたったかな。男の子のチームは、女の子のチームの線へ、女の子チームは男の子のチームの線まで走

っていきます。どちらの方が先に全部つくかな。途中でぶつからないようにうまく走っていくんだよ。わかったなら、それではヨーイドン」

子供達が一斉に走り出した。真中頃になると、丁度すれ違うのだが、一瞬ヒヤリとする。ぶつかる子がいるのではないかな……。案の定、途中で一人がころび、一人が相手とぶつかってひっくり返った。

「エーンエーン」と泣きでしたが、一人は自分で起きて又走り出した。

一人はその場で泣いている。他の子はもう全員相手の線に立っている。泣いている子のチームの子が、

「オーイ早くこいよー」といったかと思うと、四人の子どもが走って、その子を起こして、自分のチームまでひっぱって来た。そして「泣くなよ」その子は涙をふいて並んだ。

私だけがの有無を確かめる間もなく、子どもが声をかけたので、そのままにしておいたが、涙をふいてきちんと並んだその子の姿をみて、ホッとした。

「さあ、うまく線の上に並べたかな。内側を向いて、きちんとときをつげができたかな」子供達の中には、外を向いている子も何人かいたが、この言葉をきいて、きちんと並ぼう

と、必死であった。男の子の何人かが、まだ手をブラブラしていた。

「この勝負、女の子の勝ちー」

「ワッ」と、女の子のチームの大歓声。

男の子はくやしそうな顔をしている。

(自分の説明不足が多く、これはいけないと思って、)

「さあ、もう一度やってみよう。こんどは、皆自動車になつて、ぶつからないように上手に運転しよう。向こうの線にいたらこつちを向いて、手を上にあげて、もう私は着きましたよというししが全員早くできたチームの勝ちだよ。ちよつとアリンコがやってみるからね。」

(ここで見本をみせた。)

「さあそれではいくよ」

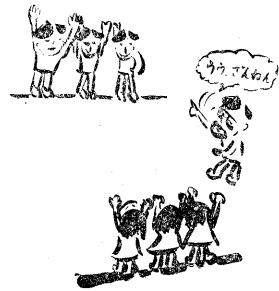
女の子のチームも男の子のチームもいつの間にか、

「エイエイオー」とかけ声と共に手をふりあげた。

「ヨーイドン」

こんどは皆上手にすりぬけた。ごちゃごちゃがワッとすりぬけたかと思ったら、線の上にピタッととまると、手が上にあがる。

急に静かになったので、私もびっくり、何だかおかしさが



女の子のチームの勝ち

「アリンコ、もう一回、もう一回やろうよ」

「よしもう一回やるぞー」

皆がうまく並ばないと、勝てないという、ルールを理解し始めた。

③ 「感じ」から「展開」

この遊びは、緊張（ヨイイ）弛緩（ドン、すりぬけるところ）緊張（並ぶ）の流れが程よい楽しさを持っているのではないかと、思う。この遊びを何度か行っているうちに、ただ走ってすりぬけるだけでなく、ある形の姿をして通りぬけたらどうかと思って、こんどは走らないで、

「片足でケンケンして、向こうの線までいってみよう」

こみ上げてきた。

両チームをジロジロッと

見る。お人形さんのように、

じっとしたままで。男の子の

一人が手をおろしてしまっ

た。

「ウウ、残念、この勝負又

そして次に、「うさぎになってみよう」

すると子供達の中から、

「変身のポーズでやろうよ」

「どんなかっこうがいいかな」

すると次々にポーズをだしてきた。

「よし、ワカッタ、最初はAくんのポーズでやってみよう。

A君もう一回皆にどんなかっこうか見せてやってね」

ポーズをつくる。

「わかったな。じゃ皆でそのかっこうをしてみよう。Aく

ん、皆できてるかみてね」

「まだ、あの子ちょっと違うなあ、こうだよ。こう、そう」

「ではいくよ、ヨイドン」……

こうして、次々と子どもからでてきたポーズで、遊びが統

けられた。

雨が降って外でできなかった時に、ホールで「赤ちゃんハイハイ」「魚」「カンガルー」「インベーター」「カニ」「ヒヨコ」「ヘビ」「カエル」になって、できるだけはったりとんだりする遊びにした。

園外で行なった時は、「ワーツ」とすれ違う時も、ついでからも大きな声を出す方法や、忍者と違って音もなく走る方



法も展開したが、実に楽しかった。

④ 「展開の転回？」

昨年の八月に、広島の講習会で、年長児四十人を、実際に舞台にあげて、ただ走って、移動する遊びを行なった。(私も初めてこの場で出会った子ども)

二回すんで三回目をやったところ、全員の子供がそれぞれ相手のチームの線の上に立っているのに、一人の子どもが、ノンビリと、おじいさんの格好をして、ゆっくりと歩いているのです。他の子もびっくり、私もハッとして見とれてしまいました。会場からは、拍手がおこった。

ルールを知っているながら、尚かつ自分で考えた動作をみて、もう勝ち負けは私の外にいつてしまったのです。その時、私がどんな言葉をいつて、その結着をつけたか、確かだ

はないが、

「○○くんのすこく面白かったね。次は、○○くんがやっていたおじいさんでやってみよう」

う

「ヨイドン」

みんなおじいさんになって、

移動をはじめた。

オヤオヤ、又彼が一番のんびりしているのです。アレッ、こんどは、首と手をピコンピコン動かしながら、少しづつ進んでいる。

又会場から拍手が起こり、その動作の面白さに私もころげまわってしまった。突然予想もしない動きに、おたおたしてしまい、自分がどんなふうにも、子供達と接したか、定かでないが、やっとのことで、その場を、しのいだ、という感じだった。その後、他の遊びをしたが、このことがあつてから、より楽しい遊びになったと覚えてる。

⑤ 「一人から二人・三人……」

今迄の移動遊びは一人で動いていたが、二人で手をつない

だ



で、移動したら、これもなかなか楽しく展開できた。親子のつどいの時には、お母さんが子どもをおんぶしたり、子どもがお母さんをひっぱって、歩いたりもした。

三人、四人……五人になると、すれ違う時、とてもむつかしいのですが、だんだん慣れてくると、大変上手になった。

⑥ 「おじゃま虫の登場」

年長児もだんだん慣れてくると、動きのほげしいあそびが好きになってくる。前に磁石の遊びもやっていたせいか、この遊びに、ひっぱりっこを入れようということになった。

「ヨイドン」の合図で移動して、途中すれ違う時に、お互いにつかまえて、自分の進む方向に相手をひっぱって引っ張ってしまふ遊びである。

「ドン、の合図でゆっくりと10数えるよ。その間は、相手をおさえたり、つれてきたりしてもいいんだ。でも10になったら必ず手を離すんだよ。いいかな」

この遊びも最初のうちは、始めに立っていた自分の陣の線につれてきたり、10数えても、なかなか離さない子もいた。特に何もしないで、そのまま通りすぎる子には、少しでも、引っ張り合うようにしてみたり、数え方も速くしたり、

ゆっくりやってみた。

こうして移動あそびが次々に展開されてきたが今後この遊びが、どのようなようになっていくかわからないが、とても楽しみの遊びの一つになった。

あくしゅでこんにち

① あくしゅ

この遊びは、私の大好きな遊びの一つである。

「みなさんこんにちば、このお兄さんは、(自分を指さして)『ありんこ』っていうなまえです。今日はみんなで、にぎやかに身体を、動かす遊びをしましょう。よろしくね」

「へえーありだつてよー」

「ちつとも、ありみたいじゃないなー」

「ありんこなら、小さくなってヨー」等と、子どもが口々に言う。

自己紹介って本当にむつかしい。

「君の名前何って言うの」

「○○○○」

「ふーん、そうか。いい名前だね。よろしく」(ここでその

子とあくしゅをする)

すると近くにいた子が、

「ぼく○○○○っていうんだよ」

「そうか○○○○くんだね。よろしく」

(またここであくしゅをする)

そうすると、他の子供達が口々に、

「ぼくねーわたしねー」と名のりはじめ、

「ぼくにも、あくしゅして」といいはじめ、だんだんとにぎやかになってきた。

「よし、じゃみんなとあくしゅをしようね。ありんこと握手した人は、座って見ていてください。」

次々に、「こんにちは、よろしく、こんにちは、よろしく」と一人一人と握手をしていった。いそがしくかけずり回って、四十人が終わると、もうくたくた。声を出しながら動くのは、なかなかの重労働。

(そうだみんなも同じようにやってみたら?)

② 「こんにちは、さようなら」

「もうみんな友達がいっぱいいるね。今日はね、友達と握手をする遊びだよ。(二人の子をだして握手をしてみせる)

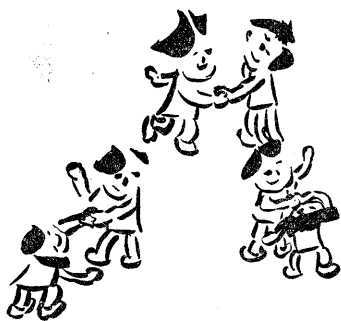
こうやって、友達と握手をして、『こんにちは』って言うんだ。そしてその後すぐ手をあげて、『さようなら』といって手をふる。したら又二人ともちがう子を見つけて、握手して、さようならをするんだ。そして、『ヤメー』の合図でずっとやっているんだよ。いいかな、ヨイドン」

「こんにちは、さようなら」

「こんにちは、さようなら」のにぎやかな声が聞こえてくる。私も一緒に参加しながら、ポカンとしている子に声をかけたり、握手をする。ころあいを見て、

「ヤメー」の合図をする。子ども達はもう、汗いっぱい。

「たくさん友達と握手ができたね。こんどは、五人の友



達と握手ができたなら、座るんだよ。」

「ワー」

さきほどのにぎやかさより更に声が大きくなって、スピードがでる。のんびりしていると、だんだん握手をする子がいなくなる。

その時は私が人数分だけ握手をしてあげて、

「アーよかったね。こんどは六人だよ」

こうして十人程もやると、もう汗だくだく。

③ 「二人はなかよし」

「この間はいろんな人と握手をしたね。今日は、ありんこのまわりを元気に走ってください。途中で、『二人はなかよし』といったら、一人友達を見つけて握手したまま座ろう」

「では元気に走れ——……」

「二人はなかよし」

ワイイ、ワイワイワイ

次々と子供達は、二人で握手して座っていく。

「今度は、ちがう友達と仲良しになろうね。では今手をつないだともだちと、かたーい握手をしてごらん。(みんなの様子を見て) さあもういいかな。それではさようならをし

て、又走りましよう」

「さようなら……」(みんな走りまわる)

「二人は仲良し」

こうして何度も行なった。

④ 「二人組あそび」

二人で手をつなぎ終ったあと、二人でできる遊びを展開してみた。

「お船がぎゅっぐら」

「ジャンケンお尻たたき」

「ジャンケンもぐり」

「ジャンケンおんぶ」「ひっぱりっこ」等です。この遊びの中にはさんで行なうと、又大変楽しくなった。そうこうしているうちに、ただ座るだけでなく、ひっくり返っている子や、だきあっている子を見つけたので、

「こんどは二人で好きなかっこうをつくってごらん」

「二人はなかよし」

子供達は色々と工夫をする。とても楽しいかっこうができたので、そこでこれに名前をつけることになった。名付けて、「ポーズ大作戦」



次からはふたりはなかよしとは言わないで、「ポーズ大作戦」という言葉でやってみた。面白いポーズができたチームに、拍手をしてあげたら、他の子ども達は負けずに、面白いポーズをつくるようになった。この遊びを運動会でやったのですが、この時は10秒間静止で、ピタッと動作をとめるところと、どんなポーズが生まれるかわからない楽しさがあり、好評を博しました。

ある時は、この中から面白いポーズをみつけ、「○○ちゃん」と○○んのつくったポーズをみんなだまねっこしてみよう」とか、組体操の時に使ったので、子ども達も得意顔であった。

⑤ 「人数を増やす」

二人はなかよしから、人数をふやして、「○人はなかよし」と展開し、人数がうまく集らなかつたチームは、こんどはがんばるように、「エイエイオー」をさせたり、「おまじない」をかけるのもいい方法でした。冬の寒い時、「○○はなかよし」で集まった子ども達同志、手をつないで、他のグループと、「ワッシュヨイ、ワッシュヨイ」といって、ぶつかり合う遊びになったり、輪のまま、手をつないでポーズ大作戦もやってみましたが、このように、握手から始まった遊びが次々と子ども達の現場の中で、どんどん変化し、動いていき、同じあそびを展開したとしても、「あそび」はそこに集まる子どもによって、変わっていきました。そこが実に楽しく又大切なことだと思ふのです。

いつも毎回楽しくできたなどということはありません。試行錯誤しながら、子供達同志がより多くふれ合ったか、どれだけ一方的にならずに、みんなでつくったか、反省しながら子どもとふれ合いたいものです。

(日本児童遊戯研究所)